

国際シンポジウム

文化の汽水域

～東スラヴ世界の文化的諸相をめぐって～

入場無料

途中入退場
自由

日時：**11月1日(水)**

場所：**東京外国語大学**（府中キャンパス）
研究講義棟 422 総合文化研究所会議室

共催：**東京外国語大学総合文化研究所**

プログラム

- 12:40～12:45 開会の挨拶
- 12:45～13:30 越野剛（北海道大学）：スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ作品の形式的側面について
- 13:30～14:15 大森雅子（東京大学学術研究員）：ミハイル・ブルガーコフの「まち」—作家の原点としてのキエフ
〔14:15～14:25 休憩〕
- 14:25～15:10 原真咲（東京外国語大学大学院博士後期課程）：コサックのパーイダ、またはドメイトロー・ヴィシユネヴェーツィケイ公のマニエリスト的転回
- 15:10～15:55 オレスタ・サブランナ（リヴィウ国立大学）：現代ウクライナ語における属格の対象的用法—イワーン・ネチューイ＝レヴィーツィケイの作品を基に—
〔15:55～16:10 休憩〕
- 16:10～16:55 塩川伸明（東京大学名誉教授）：グリゴリー・ヨッフエのベラルーシ論とアレクシエーヴィチ
〔16:55～17:00 休憩〕
- 17:00～17:30 全体ディスカッション
- 17:30～17:35 沼野恭子（東京外国語大学）：閉会の辞
司会進行：前田和泉（東京外国語大学）

このシンポジウムは科学研究費基盤（B）
「ロシア・ウクライナ・ベラルーシの文学と社会に関する跨橋的研究」
（課題番号 15H03192、代表：沼野恭子）により開催されます。

国際シンポジウム

「文化の汽水域～東スラヴ世界の文化的諸相をめぐって～」

日時：2017年11月1日（水）

場所：東京外国語大学（府中キャンパス）研究講義棟 422 総合文化研究所会議室

【プログラム】（敬称略）

12:40-12:45 開会の挨拶

12:45-13:30 越野 剛（北海道大学）

「スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチ作品の形式的側面について」

13:30-14:15 大森 雅子（東京大学学術研究員）

「ミハイル・ブルガーコフの「まち」—作家の原点としてのキエフ」

14:25-15:10 原 真咲（東京外国語大学院）

「コサックのバーイダ、またはドメイトロー・ヴィシユネヴェーツィケイ
イ公のマニエリスティック的転回」

15:10-15:55 オレスタ・ザブランナ（イワーン・フランコー記念リヴィウ国立大学）

「現代ウクライナ語における属格の対象的用法—イワーン・ネチューイ＝
レヴィーツィケイイの作品を基に—」

16:10-16:55 塩川 伸明（東京大学名誉教授）

「グリゴリー・ヨッフエのベラルーシ論とアレクシエーヴィチ」

17:00-17:30 全体ディスカッション

17:30-17:35 沼野 恭子（東京外国語大学）：閉会の辞

司会進行：前田 和泉（東京外国語大学）

このシンポジウムは科学研究費基盤（B）「ロシア・ウクライナ・ベラルーシの文学と社会に関する跨橋的研究」（課題番号 15H03192、代表：沼野恭子）により開催されました。以下に、各報告の要旨を掲載します。

越野 剛 (北海道大学)

スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチ作品の形式的側面について

スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチの作品はインタビューを重ねて集められたソ連の「小さな人」の声を組み合わせて作られている。そのジャンルはドキュメンタリー文学やオーラルヒストリーなどとされてきた。しかしそれらの「声」は独自の文学的な戦略にしたがって編集・配置されている。本発表ではアレクシエーヴィチの創作の内容ではなく、形式的な側面に焦点を当てて、音楽的構成、演劇化、聞き手の形象という3つの手法によって芸術的なテキストが構築されていくプロセスを明らかにする。

(1) 音楽的構成

『戦争は女の顔をしていない』(1985年)のような初期作品では個別の証言は単純に並べられているだけである。しかし『チェルノブイリの祈り』(1997年)はすでに複雑な構成を持っている。3つの章のそれぞれが完結したストーリーの他に兵士・民衆・子供たちの断片的な短い声をまとめた「コーラス」と呼ばれる部分を含み、またプロローグとエピローグとして夫を原発事故で失った2人の妻の長い物語が置かれている。このようにアレクシエーヴィチのテキストは次第に音楽的なハーモニーを思わせる構造を有するようになる。作者自身がしばしば音楽的なメタファーを用いることも特徴的である。

(2) 演劇化

アレクシエーヴィチが作品の材料とする「声」はそれぞれが1人語りの芝居を思わせる。しかし初期作品から後期作品に向かうにつれて、モノログからダイアログへと演劇的要素の発展を見ることができる。『チェルノブイリの祈り』では7人のサモシオール(汚染地居住者)がひとつのインタビューで次々に発言する場面があるが、それらの声は対話的には組み合わせられていない。しかし『セカンドハンドの時間』ではソ連解体について正反対の意見を持つ2人の女性の談話が交互に重ねられ、対話的な筋を作り出している。「泣く」「笑う」「沈黙する」などのト書きも演劇的な身振りをテキストに加えている。

(3) 聞き手の形象

インタビューは取材する相手との対話であるはずだが、アレクシエーヴィチのテキストからは聞き手の「声」が巧妙に切り取られている。切れ目がないように見えるモノログは文学的な編集作業によって創られたものだ。しかし読者には見えないアレクシエーヴィチを語り手は常に意識しており、質問を投げかけたり、反論したり、共感を求めたりする。テキストに残された対話の痕跡によって聞き手の姿を再構成することができる。その形象は『戦争は女の顔をしていない』ではベテラン女性兵士から憐れまれる駆け出しのジャーナリストから、『セカンドハンドの時間』では政府高官と対等に渡り合う大作家へと進化する。

大森 雅子（東京大学学術研究員）

ミハイル・ブルガーコフの「まち」—作家の原点としてのキエフ

ミハイル・ブルガーコフ(1891-1940)は20世紀を代表するロシア語作家として、『犬の心』(1925)や『巨匠とマルガリータ』(1928-40)等、モスクワを舞台にした作品を数多く残した。しかし、彼はキエフ出身のロシア人作家で、49年の短い生涯のうち、28年もの歳月をキエフで過ごした。革命後の内戦がテーマの処女小説『白衛軍』(1922-24)や1920年代に書かれた初期作品の一部は、キエフでの実体験に基づいている。本報告では、そうした作品を中心に取り上げた上で、キエフで得た経験が、その後の作家の創作にどのような影響を及ぼしたか考察する。

ブルガーコフは、自伝的小説『白衛軍』の中で、キエフのことをГородと大文字で記し、愛情と親しみのこもったまなざしで、「まち」の美しい風景を描いている。しかし、作家にとってのキエフは、常に楽園の地であったわけではない。自らのキエフでの内戦の経験について述べたルポルタージュ『キエフのまち』(1923)の中で、1917年の2月革命から1920年までに、キエフでは14回も政権が交代しており、ブルガーコフはそのうちの10回を直接体験したと書いている。また、『白衛軍』の舞台となっている時期は、1918年12月に白衛軍を支援していたドイツ軍のウクライナ傀儡政権がドイツに逃亡し、シモン・ペトリューラ率いるウクライナ民族独立派による占領が始まる直前から、1919年2月のボリシェヴィキによってキエフが占領される前夜までの約3ヶ月間である。

ブルガーコフはキエフ出身のロシア人として、またロシア語作家の立場から、白衛軍義勇隊に参加した登場人物たちに共感を寄せつつ、『白衛軍』の他、『赤い王冠』(1922)や『私は殺した』(1926)などの内戦を扱った作品を書いた。しかし、医師だった彼は、白衛軍のみならず、赤軍やペトリューラ軍にも動員されたことがあった。そうした経験をもとにして、敵軍の「内側」からも内戦期の暴力、狂気、そして罪の問題を描き出した。

ブルガーコフの作品には、対立関係にあるものを俯瞰する、脱中心的な視点が存在していることが大きな特徴として挙げられる。それは、革命後のキエフに乱立した3つの教会に関する考察（『キエフのまち』）や、赤軍の兵士のために天国での部屋が準備されているというユーモラスな描写（『白衛軍』）などに見受けられる。

ブルガーコフにとってキエフは、遺作となった『巨匠とマルガリータ』の創作の際にも、インスピレーションを与えてくれた「まち」だった。特に、キエフの聖アレクサンドル大聖堂の傍らの展示館にあった巨大なパノラマ画「ゴルゴダ」や、聖ヴォロディームイル大聖堂の壁画は、小説のエルサレム・セクションの素地になったと考えられている。つまり、キエフで刻み込まれた視覚的な記憶がなければ、『巨匠とマルガリータ』の壮大なテーマは生まれなかったかもしれないのだ。その意味でも、キエフは作家の原点としての「まち」であった。

原 真咲（東京外国語大学大学院博士後期課程）

コサックのバーイダ、またはドメイトロー・ヴィシュネヴェーツィケイ公のマニエリスト的転回

本発表では、ウクライナの高貴なる公、ドメイトロー・ヴィシュネヴェーツィケイが、如何にしてコサックの放蕩者バーイダとなったか、その変身を可能ならしめた発想法について顧みる。

コサックのバーイダ（Козак Байда）は、ウクライナ民謡の主人公のなかでも特に人気の国民的英雄である。その名は「憂さ知らずの遊び人」を意味していて、フルシェーウシケイの言うように《放蕩者のコサック》の典型となっている。彼が主役の歌『帝の都のバザールで』（«В Цариграді на риночку»）の物語はこうである。帝（スルタン）の都でバーイダは連日連夜、酒宴を張っている。帝が現れ、改宗して皇女を娶り、ウクライナの主となれと勧める。バーイダはイスラムの信仰と姫を貶す。帝はバーイダを捕らえさせ、肋に鉤を突き刺して吊るし上げる。バーイダは、帝と后、姫を矢で射る。バーイダは自らを晒し者にした帝に復讐し、「これぞバーイダへの仕置の報いぞ」と見得を切る。本歌は、ホッケがマニエリスムとして定義する、寛ぎを許さぬ変則性と緊張に満ちたアジア風の歌に分類できる。

一方、史的人物であるドメイトロー・ヴィシュネヴェーツィケイ（Дмитро Іванович Вишневецький, 1517頃-1563/64）は、ウクライナ西部の町ヴィーシュネヴェツィを本貫としたルーシの公である。リトアニア大公ズィグムント2世に仕えながら、ルーシの地を侵掠して止まないクリミア汗国の脅威を取り除くため、コサックを率いてドニプロー川下流の島に城を築いて戦い（これゆえにザポロージュヤ・シーチの開祖と呼ばれる）、支援を得んとモスクワのイヴァン4世、オスマン帝国のスレイマン1世に近づいて、これら危険な隣国の君主に伺候した。モルドヴァ国主となる権利を持っていたがために同国の内紛に巻き込まれ、最後は裏切りによって捕われて、オスマン帝国の都で鉤吊りの刑に処された。汎ヨーロッパ的キリスト教同盟を呼び掛けた彼の行動原理は、ルネサンス文化とともにウクライナに広まったヨーロッパ防衛理念に結び付けられる。

これを献身的英雄に祀って追悼する讃から生まれたのがバーイダの歌であるというのは今日衆目の一致するところであるが、歌のなかでは公の身分も名も失われ、その生涯の活動も描かれない。バーイダ＝ヴィシュネヴェーツィケイの物語で残ったのは、コサックとしての放蕩、この世の栄華の拒否、鉤吊りと復讐の3プロットだけである。従来、その2点目がイスラム教物質世界に対するキリスト教精神世界優位の主張として強調され、歌の主題の如く言われてきたが、描写の密度とインパクトからしてもこの歌の真言はそこではなく、処刑されたバーイダが復讐を果たす最後の場面にあると考えるべきであり、ゆえにこれは敗者たる死者の怨念に阿って荒ぶる魂を鎮めんとする、折口信夫の言うところの挽歌である。さらに歌の成立を考える上で重要なのがひとつ目の点で、飲んだくれる様が往時のコサックの外社会性、或いは社会的モラトリアム性をよく表しているのであるが、そのモラトリアムの本質は遊戯性にある。つまり、放蕩者バーイダとは、ルネサンスの真面目な英雄ドメイトロー公が遊戯に耽るマニエリストの発想法に従って変身した姿なのである。

オレスタ・ザブランナ（イワーン・フランコー記念リヴィウ国立大学）

現代ウクライナ語における属格の対格的用法

—イワーン・ネチューイ＝レヴィーツィケイの作品を基に—

ウクライナ語の属格の中心的な用法は、対象の表示である。その種類には、常に属格を支配する動詞の対象に加え、対格支配の動詞や主格が否定された場合に現れる否定属格（не помігив іронії）と、対象がモノの部分として意識される部分属格（приніс солі）とがあり、これらはある程度バルト・スラヴ語派の言語全体に共通する現象であると言える。一連の研究でも指摘されているが、対象をモノの一部として捉えるか否かが話者の解釈次第である場合も多く、線引きは困難である。また、писателю（手紙を書く）のような、部分として捉えられているとは言えない属格による目的語も見受けられる。

通時的に見ると、ウクライナ語では属格の使用が減って対格に置き換わってきている。これに関しては、内面的なプロセスもあるが、それと同時にロシア語からの外的な影響も指摘される。

本論ではロシア語の影響がないと考えてよい、話しことばに近い文体で書こうとした 19 世紀後半の代表的作家イワーン・ネチューイ＝レヴィーツィケイの長編小説 2 作品における属格使用を分析することで、ウクライナ語属格の対格的用法の解釈を試みた。属格が現れるケースを、①常に属格を支配する動詞、②属格も対格も支配する動詞、③否定属格の 3 グループに分けて分析した。

ウクライナ語の属格支配動詞には、ロシア語の場合と同様に目標、範囲、分離、部分という意味があるほか、両作品では根本への依拠・服従・維持という意味が確認された。動詞が対格も属格も取り得る場合、いわゆる部分属格の他に、目標や根本への依拠を表す属格も出現している。目標や根本を表す場合には属格の事例の方が多いが、対象を指す名詞が動詞を先行する場合、または文中に状況語や修飾語が現れる場合には、対格が選択されるケースも散見される。それとは別に、動詞に支配される-a(-я)格変化の不活動体男性名詞が属格になる場合には、動詞はダイナミックな物理的動作の発動、ひどい目に遭う体験、完了体動詞の 1 回だけの動作・準備動作、対象の獲得・放棄・発見・付着・所持、身体部位に関する動作を表すことが多い。

否定属格はほぼ維持されている。否定文で目的語の対格が現れる事例は 18 例と少なかったが、その数にしてははっきりとした傾向が見える。最も多いのは名詞（代名詞）＋動詞という動詞句の目的語で、述語動詞は主体の意図や許可を表すケースである。その場合には、否定助詞 не は意図や許可自体を否定していて、句の目的語にまでは及んでいない可能性が高い。また、否定節とそれに対比される肯定節からなる複文では、肯定形の動詞で表される動作が強調され、否定形で表される動詞の対格が属格に交替することはない。目的語が文頭に立つ不定人称文の対格も、1 件見られた。

ウクライナ語における属格の対格的用法のうち、目標、分離、部分、依拠の意味がネチューイ＝レヴィーツィケイの作品で確認できた。それら全ての意味の背景には根本への意識があったと思われるが、その根本への依拠を表す属格が最も早い段階で崩れ始めたのではないかと推測する。

塩川 伸明 (東京大学名誉教授)

グリゴリー・ヨッフエのベラルーシ論とアレクシエーヴィチ

ベラルーシという国は日本でも欧米でもあまりよく知られていない(私自身も率直に言って、それほどよく知っているわけではない)。それでいながら、「ナショナリズムなき民族」とか「欧州最後の独裁国」といったレッテルだけはわりと広く行き渡っているが、それはどこまでの確な認識に基づいているのかという問いかけを出した人がいる。グリゴリー・ヨッフエ (Grigory Ioffe, ラドフォード大学教授) という人である。

ヨッフエはモスクワ生まれ、モスクワ育ちだが、出自としてはユダヤ系ベラルーシ人であり、幼児より頻繁にベラルーシを訪れた経験をもつ(ソ連時代末期に出国し、アメリカに渡って学者となった)。そうした経歴から、欧米の社会科学者の中では異例にベラルーシの社会と文化を熟知しているが、エスニックなベラルーシ人ではないため、ベラルーシ・ナショナリズム——実はこの概念自体が論争的であり、単一の「ベラルーシ・ナショナリズム」があるわけではないと彼はいう——とは距離をおいている点に、彼の議論の特徴がある。

ヨッフエの著書 *Understanding Belarus and How Western Foreign Policy Misses the Mark*, Rowman & Littlefield, 2008 は欧米で優勢なベラルーシ論およびそれに基礎をおいた対ベラルーシ政策に対して批判的であり、そのことが彼の仕事を論争的なものとしている。場合によっては、やや偏っていると見られる点もなくはなく、「これが決定版だ」ということはできない。それにしても、現地情勢をよく知っている——ソ連出国後も頻繁にベラルーシを訪れ、友人・知己も多いらしい——だけに、興味深い洞察が数多く含まれる。この著作は歴史・社会・文化・言語などを扱った部分と、現代の政治・経済を扱った部分とからなるが、今回は前者に力点をおいた紹介を行ない、参加者各位の批判的検討を乞いたい。

ヨッフエの独自の主張のひとつの側面として、ベラルーシ人がロシア語を使うのは「民族精神を失った」ものだと非難する一部のベラルーシ語至上主義者に対して批判的だという点が挙げられる(だからといって、ベラルーシ語が廃れることをよしとしているわけではないが)。そのことの例証として、「ロシア語を使うベラルーシ人リベラル」という存在を彼は指摘し、アレクシエーヴィチはその代表者だとする。この点と関わって、報告ではアレクシエーヴィチの『セカンドハンドの時代』における「ソヴェト人／^{それん}粗連人(COБОР)」概念についても検討してみたい。